

妊娠女性の意識に関する研究—「わが子を授かる」という意識について—
 お原大女文研センター 中山まさ子

目的：かつての日本社会では、子どもは授かるものであったといわれている。こうした意識は今日も存在するものなのか。その意味する内容はどのようなものであるのか。本研究は、既婚女性の妊娠・出産に関する聞き取り調査に基づき、1980年代の子産み意識を、可能な限り具体的には、「わが子を授かる」という表現の用いられ方、意識の存在、およびその内容のあり方を探った。

方法：妊娠・出産を体験しつつある(した)関東在住の女性15名から、複数回の聞き取り調査を行うことで得た資料の内容分析をする。(時期：1987~1990年、回数：一人2~9回、延べ時間：3~24時間、記録法：調査時に交わされた会話を録音し逐語文字化した資料・録音できなかった会話・語りを文字化した記録)

結果：①授かるという意識は、自分の妊娠に関して語る際の、日常的表現として(は用いられることが少ない(むしろ、つくる・つくらばいという表現が頻繁に用いられる)。しかし、妊娠状況の意識を語る手段としては、頻繁に使用されている。②また、授かるには様々な意味が付託されていた。例えば計画通りの妊娠に対する喜びの表現として/望まぬ妊娠に対する落胆を沈静化せる意味で/生殖技術を用いばい妊娠状況に対してなどであった。一般に暗黙の前提として授かるの意味を表現した女性は、むしろ自分の妊娠をつくった結果だと表現しがちだった。以上から、今日の子どもを授かるという意識は多義的であり、子どもをつくるという意識とは位相が異なる意識であること、よって子どもをつくるという意識と共存可能であり、対立関係にあるとは言いがたいことを示した。